

長篠城(末広城, 扇城) (国史跡, 百名城) (新城市長篠字市場)

長篠城（ながしのじょう）は、三河設楽郡長篠（愛知県新城市長篠）にあった城（平城）。現在は国の史跡に指定され、城跡として整備されている。天正3年（1575年）の長篠の戦いに先立つ長篠城をめぐる激しい攻防戦で知られる。

永正5年（1508年）今川氏親に誼を通じた菅沼元成が築城。元成と、その子孫・長篠菅沼氏が居城とする。

元亀2年（1571年）徳川家康に服属していたが、武田軍による三河侵攻の一端で、天野景貫に攻められる。攻守双方の払った犠牲は大きかったが、陥落だけは免れた。その後、菅沼総領家・田峯菅沼氏から遣わされた使者の説得を受け、城主であった元成の直系玄孫・菅沼正貞は、心ならずも武田軍の圧力に屈した。

元亀4年（1573年）、武田家の当主であった武田信玄の病が悪化したことにより、前年末から続いていた武田軍の西上作戦が春には切り上げられ、武田軍は本国へ撤退。その途中で信玄は死去。その間隙を徳川家康によって攻められる。城主・正貞は天正元年8月（1573年）には開城退去、城に返り咲くことはなかった。以後、武田軍の再侵攻に備えて、家康により城が拡張される。現在残る本丸の大規模な土塁などはこの時のものと考えられている。

天正3年5月21日（1575年6月29日）、信玄の跡を継いだ武田勝頼が1万5千の兵を率いて、奥平信昌が約500の手勢で守る長篠城を攻め囲み、長篠の戦いが始まる。

天正4年（1576年）前年の長篠城の攻防戦で城が大きく損壊したこともあり、奥平信昌は新城城を築城、長篠城は廃城となる。

構造

豊川（当時は寒狭川）と宇連川（当時は大野川）が合流する断崖絶壁の地点に本丸を置き、その隣に二の丸、三の丸、弾正曲輪、服部曲輪、野牛曲輪を築いている。

小説家 伊東潤は『歴史人』2012年6月号（KKベストセラーズ）の連載寄稿「城を攻める⇒城を守る」にて、「構造に工夫が乏しい典型的な土豪の城である。それほど堅牢な城とは思えず、武田の大軍に落とせない城とも思えない。武田軍はこの城を囫として、後詰めに来る信長・家康をおびき出して決戦するつもりだったのではないか。しかし甘く見た長篠城を落とせないままでの合戦を強いられるなど、齟齬（そご）をきたした上で敗北した。」などと分析している。

Wikipedia による



